
Fate/Shadow Lie

むっすー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / S h a d o w L i e

【Nコード】

N 4 6 8 0 B A

【作者名】

むっすー

【あらすじ】

5回に渡る悲劇の果て、聖杯の解体を持って幕を閉じた冬木聖杯戦争。魔術師を震撼させた戦争はもう2度と起こることは無いはずだった。

過ぎ去った事件として、一部に語り継がれるのみの存在であるはずだった。

12月、某県の主要港町『御影市』において、再びその兆候が姿を現すまでは。

誰が、どうやって、なんの為に？

分かることは、これはかつて冬木市で行われたものとは似て非なるもの。模倣であるということだけだった。

完全か不完全か。

本物か偽物か。

真実か虚偽か。

何一つ実態の明かさねのまま、御影市聖杯戦争は幕を開ける。

彼は悲願成就の為、彼は衝動の赴くまま、彼女は好奇心をくすぐられ、彼は過程という糧を求め、彼は無力の否定の為、彼女は亡き父の遺志を継ぎ、彼は己が欲望を満たす手段として。

7人は、影の渦へと身を投じる。

以下言い逃れ

・遅筆

・世界観や設定の矛盾があるかもしれない

・稚拙文章

・オリキャラ満載、オリ設定も多少

本作は fate/stay night の二次創作に当たります。根底の設定のみ TYPE - MOON 共通のものを拝借し、サーヴァントは「みんなでかんがえるサーヴァント Wiki」より引用、少々の変更を加えたものです。ほとんどオリジナルなので、ご覧になられる際はご注意ください。

序章

重苦しく尋常ならざるこの空気は、きっと地理的要因だけの問題ではないだろう。

大空洞を照らすものは無数の松明の明かりのみ。松明が照らすものは時代錯誤な建造物。それを例えるならば、祭壇という言葉が一番しっくりくるだろう。

弱々しく揺れる炎を背に、祭壇へと続く階段の前に2つの人影が落ちる。

薄明かりが照らしたのは精悍な顔つきの青年と歳若い少女。

青年の長く伸びた銀髪が薄明かりを反射し、不気味に輝く。

少女の長く伸びた銀髪が薄明かりを吸収し、神秘的に輝く。

2人の間に言葉はない。否、言葉など要らない。

心中に渦巻く感慨など、お互いに語るまでも無いことだ。

あれからどれほどの時間が経過しただろうか。

『頑張ろう。ね？ ベアッド』

激励してくれた少女の言葉が胸のうちに木霊する。

本当に長かった。

『おいおいベアー、そんな顔するなつてば。アタシが適任なんだから。おねーちゃんに任せときなよ』

辛い役割を進んで引き受けた姉の笑顔が幻視される。

苦渋の選択とはああいうことを言うのだろうか。

そして姉はいなくなって、3人は2人になった。

『でも、ようやく……全てが終わる』

『うっん、ちがうよベアッド。始まるの。終わりが、これから始まるの』

青年　ベアッド・アエレディタスの言葉に、少女が答える。

『ああ、そうだったな。じゃあ始めよう。ナヴィス、手伝ってくれ』

るか？」

「それ、答える必要がある？」

少女 ナヴィス・デウボーソルははにかみながらそう言って、

「っ……！」

ベアットの唇を唇で塞ぐ。

唐突のことに驚くも、ベアットはそれを受け止め、そしてゆっくりと彼女を抱きしめた。

彼女の行為は、返答にしてはあまりに情熱的。

しかし、そんな彼女だからこそ、彼はこうしてやってこれたのだ。

両親を失っても。

姉を失っても。

彼女がいたから、心が折れることはなかった。

何よりも強い心の支柱なのだ。

どちらともなく唇を離すと、名残惜しそうに唾液が薄い糸を引いた。

「ベアット、私はあなたに全てを捧げるよ」

「……ありがとう、ナヴィス。俺も君に全てを捧げよう」

幾度と無く交わした言葉。

今日この日に限っては普段とは重みが段違いだった。

「さあ、終わりを始めよう、ナヴィス」

「うん、終わりを始めよう、ベアット」

そして二色の声音が反響する。

『我らが悲願は、遙か太古の時を越えて成就される』

相馬祐一

季節は冬。

御影市の住宅街の一角に、彼は住んでいた。

時刻は0時。ちょうど今、日付を越えたところだ。

骨まで凍るような寒さの中、今頃みんな震えながら寝てんだろう
など他人事のように思いながら、相馬祐一は自室のベッドに転がり、
己が右手を天井に突き上げるような形で見つめていた。

幼心に焼きついた『魔術師』という響き。

とにかく不思議で、純粹に憧れていた。

きつとアニメや漫画みたいにかっこよくて強い、一種の理想像。

自分もそんなふうになれるんだって、訳も無く嬉しかった過去。

……まあ、現実はその甘いものでもないわけだが。

かつて炎や雷が出ると思い焦がれた右手。もちろん未だに出たこ
とは無い。

それを思うと、連動するように兄の記憶も蘇る。

一緒に鍛錬していたような気がするのだが、日に日に離されてゆ
く実力。

始めは歳のせいだろうと思っていた。自分も頑張ればああなれる
のだと信じて疑わなかった。

現実に気付いたのはいつ頃だっただろうか。

何の脈絡も無く気付いてしまった。

ああ、俺にはそもそも才能ってのが無いんだな、と。
気付いてからは早かった。

両親から「いらぬもの」「失敗作」等と罵られるなんていうこ
とはなかったが、憐憫の視線もなかなか鋭い凶刃であったように
思う。優しさとは時に憎悪より鋭い刃となるのだと、祐一は身をも
って体験した。

両親からは憐れまれ、兄は自分に見向きもせず、自分は己が才能

を呪った。

そんな環境にいてどうして健全に育つというのだ。

おかげさまで人格は歪み、勘当されるような形で家を出て一人暮らしをはじめ、今や立派な根暗インドア駄目男である。

「……あー」

治らないな、この自虐癖も。

自嘲するように祐一は苦笑した。

右手を下ろし、深く嘆息する。

先ほど暖房は切った。部屋の空気を冷気が侵食していく。

暖色、寒色という言葉があるけれど、この空気の変化を色にするならばまさにそんな感じだろう。

温かい恒常的な朱色は、冷たい非常的な水色に塗り替えられていく。

魔的なモノが、部屋に入ってくる。

ふっと、床を照らしていた月明かりに影が差した。

「……あの、いい？」

控えめな声が冷たい空気を震わせる。

目を向けると、いつの間にか月明かりを背に少女が立っていた。

重く輝く長い黒髪に白のワンピースという簡素な出で立ち。普通なら寒くて居られないような出で立ちなのだが、少女の様子からは寒さなど微塵も感じられない。

白く透き通った肌は月光を吸い込み、本当に光っているようにさえ見えた。

だが、驚くようなことではない。

祐一は彼女を知っている。

「どうした？」

顔だけ向けて問う。

「志乃さんが呼んでるよ。立ち会って欲しいって」

「あれ、今日だっけ？」

こくりと少女は頷く。

しまったなあ、すっかり失念していた。
今から行けば、間に合うか。

「ん、わかった。めんどくせーけど、行ってやるかな。お前はどうする？」

「行く」

短く少女は答える。

鈴の転がるような声、というと陳腐な表現かも知れないけれど、少女の声はまさにそんな表現を思わせる。

「おっけ、了解。んじゃー行きますかな」

気だるげに一度伸びをすると、祐一はそのまま腹筋で上体を起す。

寝癖……は大丈夫か。どうせ短いからそこまで気にすることでもないし、今から会う相手は志乃だし。

ベッドから立ち上がって、

「……やっぱり気になるなあ」

祐一は少女を見て呟いた。

いくら彼女とはいえ、この時期にワンピース1枚だなんて寒くはないのか？

そう問ってみるも、少女はただ首を振るばかり。どうなってるんだ一体。

まあ言っても仕方が無い。少女がいいならばそれでいいのだろう。少なくとも祐一は普通に寒いのだ。壁にかけてあった厚手のジャケットを羽織り、彼は寒さを凌ぐことにした。

少女と共に部屋を出て、祐一は玄関へ向かう。小さいとはいえない階建ての家に男子高校生が1人暮らしというのもなかなか無駄に贅沢なのではないだろうかというも思うが、あつて困るものでもないからまあいいや。

「そうだ、志乃の方はどんな感じだった？ 準備とか一通り終わってる感じ？」

少女はふるふると首を振った。無論横にだ。

「あー……立ち会うつつーより手伝えって感じだろうな」

「志乃さん、意地でも自分でやりきるつもりでいるけど」

「そう言っただけで自分でできた事が何回あったかねえ」

皮肉っぽくそう言っていると、少女はクスリと笑った。

「じゃあ、見てあげないと、だね」

「そーゆーこと」

まったく手間のかかる幼馴染だ。もう少しあいつは頭を使うことを知るべきだろう。考えなしに行動するからこうなるのだ。

変わらない幼馴染の行動に苦笑する。だが、今回ばかりは事情が違う。普段の厄介ごととは違う。

祐一の胸も高鳴りを隠せないでいるほどに。

噂に聞いた冬木の聖杯戦争。

7体のサーヴァントと7人のマスターが競い合うゲーム。

最後まで勝ち残った勝者には、万能の願望器たる聖杯がもたらされる、と。

失われたと思ったその戦争は、ここ、御影市にてふたたび執り行われようとしているのだ。

何故かはわからない。

けれど。

再び右手を見る。

なんの力も無い、無力な右手。

だがそこには、赤い痣のような文様がくつきりと浮かんでいた。

選ばれたマスターたる証、サーヴァントへの絶対命令権、3画の令呪に他ならない。

令呪の存在のみが、聖杯戦争の開幕を何よりも雄弁に物語っていた。

「……マスター？」

隣の少女が不思議そうに祐一の顔を見上げる。30センチの身長差があれば見上げるといふ表現が正しかろう。

「あ、いや、なんでもない……わけじゃないけど」

そうして祐一は、視線を少女に向けて、

「よろしく頼むよ、メリー」

自身のサーヴァントにそう言った。

祐一の召喚したクラスはアサシン。

都市伝説に名高い『メリーさん』に他ならない。

誰がこの少女を見てサーヴァントだなんて思っただろうか。現に俺も驚いた。

けれど、間違いなくサーヴァントなのだ。

本来聖杯戦争におけるアサシンプラスは、そのクラス自体が触媒となり定められた英霊が召喚される。

だが、彼の召喚したアサシンはその法則に当てはまらない。

都市伝説の存在、メリー。英霊としても、反英霊としても、とても該当するとは思えなかった。

……まあこうして召喚された事実は揺るがないわけだから、祐一は特に気にもしなかったが。

声をかけるついでに頭を撫でてみた。

艶やかな髪はとてもさわり心地がいい。

当人は突然の事に驚いたようで、目を丸くして祐一の手から飛び跳ねるような形で離れた。

「おっと、嫌だった？」

「……………」

アサシンは肯定も否定もしない。ただ目を丸くして祐一を見るばかり。

まあ少なくとも、嫌なわけではなさそうだが……

「ま、いいか。頼むよ、メリー」

そうして祐一は同じ言葉を繰り返す。

彼の言葉に、アサシンは笑顔でしっかりと頷いて言った。

「絶対に、勝つよ」

「おっ」

才能の無い俺でも、輝ける可能性があるのなら。

やるしか、ないだろう？

玄関の戸を開く。眼前に広がった雲ひとつ無い真冬の空に、祐一は不敵な笑みをむけて見せた。

外へ足を出す。同時に、隣にいた少女は白いと息と共に溶けるようにして姿を消した。

相馬祐一（後書き）

ほとんど勢いです。

毎回文章量まちまちになるとは思います。がよろしくお願いします。

ロラン・マルフォレイ

もしも。

もしも万能の願望器なんてものがあるならば、彼は何を願っただろうか。

「……技術と知識」

何度自身に問うても、導き出される答えはそれだけだった。

そんなものどの魔術師だって欲している。彼の欲だけが人一倍強いという訳でもない。

彼はただの普通の魔術師だ。

モノ作りの好きな魔術師だ。

それに要する知識と技術は、欲しても欲しても満たされない。

そんな飽くなき欲望。

彼の中にはそれしかない。

なのに、どうして？

どうして僕なんかに、令呪なんてものが宿っちゃうんだ……？

左手にくつきりと浮き出たそれは、見紛うことなく令呪であった。混乱した。それはもう混乱した。プラモデルを作っていてトレードマークたるアンテナ部分をニッパーで両断してしまったり、卵を割ったあと中身を三角コーナーにイントウしたり、帰宅して脱いだ靴下を冷蔵庫にシユートしたりするくらいには混乱していた。

何を思ったか頭だけ炬燵に突っ込んだまま眠ってしまったり、トイレの蓋を閉めてから座ったり、河原で電話をしながら石を投げるつもりが携帯電話の方を投げてしまったりするくらいには動揺していた。

嫌だったわけではない。寧ろ嬉々とした。だからこそ理解できなかったのだ。

僕なんか選ばれていいのか、と。

けれど、なし崩しに準備を進める中で徐々に頭は冷えてきた。

過程はどうあれ、今彼には令呪が宿っている。

それは変えようも無い事実。

すなわち、聖杯戦争への参加権があるということなのだ。
ならば参加しよう。

奇跡の魔術礼装、万能の願望器を手に入れるチャンス。そんなもの人生に二度とない機会なのだから。

「まあ、僕正直聖杯自体には興味ないんだけどねー」

「ええっ!? それどういう　うわっちち! 熱い熱い!」

「お前アホか……こぼしたお茶は拭いといてよ」

ガリガリとヤスリがけの手は止めないまま、ロラン・マルフォレイは呆れ混じりにそう呟く。

そう、彼には聖杯を求める確固たる理由が無かった。

先述の通り、彼が強いて求めるものは技術と知識。だがそれは、決して安易に手に入れていいものではない。

そりやあまあ、ある程度先天的なものがあるのは仕方がない。代を重ねた血筋が優秀なのもまた事実。

その恩恵が少ないからこそ、後天的な力は己が実力を持って手に入れる必要があるのだと。

自身の研究の果てに手に入れるからこそ、それらには意味があるのだと。

結果も勿論大事だが、そこに至る過程もまた重要なのであると。
ならば彼は何を思って聖杯戦争に望んだのか。

それも『過程』なのだ。

7体のサーヴァントと7人のマスターによる殺し合い。その極限の中で無ければ見出せないモノもあるう。

つまり彼は、1つの大きな経験として聖杯戦争に臨むのだ。

無論それがとんでもなく馬鹿なことなのだろうとは思っていた。

親父に言ったら殺されるだろうな、間違いなく。

けれど、彼はその道を選んだ。

だから後悔などない。寧ろ期待が膨らむ。

他のサーヴァントの宝具、他のマスターの礼装や術式、全てに興味があった。

経験に勝る糧は無い。それがロランの信条であった。そもそもこうして日本にいる事だって、色々な経験を積むためのだから。

「ちよつとマスター！ 聖杯に興味が無いってどういこと！？」
ふいに正面から可愛らしい怒鳴り声が聞こえる。ヤスリがけの手を止めて顔を上げると、そこには本気で焦燥した美しい顔があった。近い。

……まあ、こいつとの出会いもまた経験だなと回想する。

時を遡ること2日前。

ロランの拠点は都市部の片隅にあった。

何の変哲も無い二階建てベランダ庭付きのちよつと豪華な家だ。普通に生活する分には不足しないし、最大の見所は地下にある。いい具合に魔力のたまった地下室は、彼の研究と作業にはもってこいの場所だった。

ロラン・マルフォレイという人物にはこれといった特徴が無い。髪型は短髪で、色は天然のブロンド。瞳は碧眼。生粋の外国人である。

身長だって平均くらいだし、肉付きも言うほど無い。

錬金術の流れを汲む家系に生まれ、生育過程に置いてこれといった事件も無く、成人式も迎えた現在二十歳で彼女なし。

平々凡々。

そんなことを気にする様子も無いのが彼らしいといえれば彼らしいが。

その日は前々からサーヴァントの召喚を行う日と決めていた。

召喚用の触媒も、手配通りどうにか手に入った。

黒い角笛の破片。

上手くいけば彼が召喚できるはずだ。

数々の道具を有し、戦場を駆け抜けたかの騎士が。

そして深夜、召喚の儀式は決行された。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　！」

ぼけつとしつつもしっかり者のロランは、なんの滞りもなく召喚の儀式を終了させた。

魔方阵から迸る圧倒的な輝き。期待に胸躍らせ、ロランはかたどられて行くその人影を凝視し続けた。

彼が、来る。

シャルルマーニュ12勇士が1人、美貌の騎士アストルフォ　！

魔獣ヒツポグリフォを乗り回し、数々の道具を活用して勝利をもたらした英雄。

ロランの狙った英霊が。

やがて光は収束し　召喚された英霊の全貌が明らかになる。

身長はそう高くも無い。白い外套の内側に収まる体軀はどちらかというと細い。黒いものを着ているからだろうか。

腰には様々な道具が下がっており、触媒として使用したもののオリジナルであるう角笛もうかがえた。

ここまでならば、まあアストルフォといってもそうかと頷ける。

だが、これはどういうことだ？

イメージと違ったとか言う次元じゃない。

文字通りロランは言葉を失っていた。

そんなことはお構いなく、目の前の『美少女』は快活な笑顔で言うのだった。

「キミが、ボクのマスター？」

声音も高く、まあ所々に見受けるそれっぽい紋章などから察するに騎士ではあるのだろうが、やはり『少年』の色が濃く、しかし出で立ち全てを総合してみると、それはどう足掻いても『美少女』なのだ。

頭には黒い髪飾りがついていて、編んで纏められた桃色の長い髪

は背中へと垂れている。

スラリと脚は長い。ええっと、なんだっけ、なんていうのあれ、膝上のソックスを上から吊るやつ、ガースーベルト？ 違う、それではどこぞの年末の笑ってはいけないアレだ。

それに短いスカートのように見えるけれどアレはスカートなのか？ どういうことなんだ？

名称も思い出せないまま、ロランは再び困惑する。

顔立ちは美しい。確かに美貌だ。美貌の騎士の名に相違は無かった。

しかし、それにしたって、これは……これって、どうなのよ!？

ロランは心中で叫んだ。

「……？ マスター、だよな？」

再び問いかけられ、ロランはハッと気を取り戻す。

「あ、ああ、そうだ。僕がお前を召喚、したんだが……ええっと、待って、確認させてくれ、お前はライダーのサーヴァント、アストルフオで間違いない？」

そう言うロランの心中はとても複雑だった。

YESと言って欲しいけれど、どこかで否定して欲しくもあつた。彼の中にも、召喚する英霊のイメージというものはあつたから。

もっところ、思わず憧れてしまうようなオーラを纏った美青年を期待していたのだ。

違うといわれて、「ですよー」という返答をする未来を手繰り寄せようとするが、

「そうだよ。ボクはアストルフオ、ライダーのクラスで召喚に応じたよ」

「ですよー」

台詞以外の未来は変えられそうも無かった。

「さて、契約完了だね。……どうしたの？ マスター、なんか顔色悪いような」

「ああ、うん、その、思い違いというかなんと云うか、カルチャー

シヨックじゃなくてジェネレーションギャップじゃなくて、ええっとなんていうか……」

あたふたするロランをライダーは怪訝そうな顔でうかがう。そこで初めて、彼は己がサーヴァントの目を正面から見た。

……先ほど、彼に彼女がいないと紹介したが。

付け加えるならば「いたこともない」のだ。

女性経験皆無なわけである。

幼い頃から人と遊ぶより自分のことを優先する人間だったロランは、そもそも異性とこうして間近で話したことなど数えるほどしかないのだ。

そんな彼にとって、このサーヴァントは上級者向けすぎた。

初めて合わせたアストルフォの瞳は、ただ純粹だった。

純粹に綺麗だなと、ロランは思った。

(だ、駄目だ駄目だ、何考えてるんだ僕は。頭を冷やせ、こいつはサーヴァントなんだ……！)

そう自分を叱咤するも、やはり情けないとは思いながら、彼は顔に血が上っていくのを止める事ができなかった。

「青かった顔が赤くなって……熱でもあるの？ マスター」

そんなロランのウブは心情などつゆ知らず、ライダーはロランに近寄り前髪をかきあげて額と額をくつつけた。

……。

はは、笑うがいいさ。

二十歳にもなつてその反応かよだつせえと笑うがいいさ。

指差して腹抱えて爆笑するがいいさ。

だって動けないんだよ仕方無いだろう。

突然現れた美少女がおでこくつつけて「熱があるの？」とかこの出来の悪い作り話だくそつたれ。

誰にでもなくロランは心中でそう開き直る。

彼はゼロ距離まで迫ったライダーの顔から目をそらすのに必至だった。

心臓がバクバクとうるさい。そのくせ肺はなんだか仕事をしていない。

まさか自分のサーヴァントに可愛いなんて感情を抱くとは思っても見なかった……なんとなく恥ずかしい気持ちになる。

無意識的に求めたか、あるいは距離故の不可抗力か、タイミング悪く嗅覚がライダーを捉える。

ああ、女の子っていい匂いがするんだなあ。

頭が麻痺するという感覚を、ロランは今になって思い知った。

「うーん、熱は無いよね……一体どうしたの？」

それでも本気で気遣ってくれているらしいライダー。言えるもんか、お前が可愛くて死にそうだったなどと死んでも言えるもんか。

「あ、う、その、あれじゃないかな召喚で魔力使って疲れてるとかそういう類のそれ的なあれでございましょうよ？」

「マスター、日本語狂ってるよ？」

まさか異国のサーヴァントに日本語を正されるなどと誰が想像しただろうか。それを体験してしまった僕だが、この経験も立派な糧なのだろうか。

「と、とりあえず召喚は上手くいったみたいだし、よしそうだな、僕は寝るとするよ……」

一刻も早くこの状況、具体的にはライダーから離れなければ。離れて落ち着かなければ。きつと慣れるさ、そうさきつと慣れる。人間ってそういう生き物。

きつとこのサーヴァントなら献身的なようだし大丈夫わかってくれる……！

「えー、マスター寝ちゃうの？ もっとお話しようよ、色々と！」

ところがぎつちよん、12勇士と名高い美貌のお調子者はマスターの睡眠を許さなかった。

「え？ いや、ほら、僕眠いし、0時回ってるし……」

「じゃあ今日は徹夜だね！」

「なぜじゃあに繋がった!? しかも召喚直後に貫徹とか僕を殺す

「気か!？」

「大丈夫だよ、ボクがずっと傍にいるから」

「そういう類の発言は今はやめてくれ寿命が縮まる!」

「どんな敵が来ても、ボクは絶対にマスターを守るから!」

「いやそりゃ嬉しいけども、まださすがに襲ってはこないだろうからほら大丈夫だから」

「あ、そうだ! 密着していればいつでも身を挺して守ることが出来るよね!」

「あわびゅ!？」

我ながら情けない悲鳴じみた絶叫だったと思う。

ライダーに抱きつかれた。

いや、さすがに密着のくだりは本人も冗談なのだろうけれど。

抱きついてきたのも軽いスキンシップのつもりなのだろうけれど、それこそ冗談じゃない、と言いたい。

背中に回された手とライダーの細い体に挟まれて、ロランは意識が途切れていくのを感じた。

ああ、でも。

柔らかいや。

時間軸は1日進み、次の日の朝。

ロランはいつもと同じ目覚ましの音で目が覚めた。

「……………? あれ、こじは……………」

「あ、気がついた? おはよう、マスター」

声のするほうに目を向ける。すぐ右隣だ。

ロランはベッドではなく敷き布団での睡眠が好きだった。

だから居間兼寢床は畳だし、今彼が寝ている場所もいつも通りの布団の中だ。

右隣にくると首を向けると、そこにはこちらをのぞき込むライダーの顔があった。

ワリと近い。

……。

……。

……。

「ほわっつ!?!」

理解してロランは飛び起きる。

「な、なななな、ラライダー!?! 何してんだお前はこんなところで朝っぱらから!?!」

「今現状だけを言うなら、マスターの寝顔鑑賞。結構可愛い顔してるね、マスター」

爽やかな笑顔でライダーはそう言った。

朝からライダーに殺されかかっています、どうもロラン・マルフオレイです。

「一応いきさつを説明すると、昨日マスター急に気絶しちゃったから、ああ疲れてるんだなと思って。部屋に来て見たら、布団についてうのかな? これが敷いてあったから、ああここで寝るのかと思って横にしたんだけど……」

「あ? あ、そうか、昨日……」

落ち着きを取り戻しつつある思考が数時間前の事件の記憶を呼び起こす。

…… 召喚の疲れもあるとはいえ、しかし気絶するってどういふことだよ。

「ここまで運んでくれたのか。それはすまん、ありがとう。ライダー」

「いえいえ、マスターの為にボクはここにいるんだから。お礼は寝顔で十分だよ」

ははは、とロランは軽く笑う。

幾分落ち着きを取り戻せてはいるようだ。

まともに話せるようになったところで、ロランは特に意図もなく口を開く。

「もう勘弁して欲しいけどね……いやしかし、驚いたよ、ライダー」
「何が？」

「いやほら、まさかシャルルマーニュ12勇士が1人、美貌の騎士アストルフォが、こんな美少女だったとは思わなくてね」
すると不思議なことが起こった。

序急破で説明しよう。

まずは序。

当の本人はきょとんとしていた。

続けて急。

わなわなと少し震えだし、心なし顔が朱を帯び始めた。

そして破。

叫んだ。

「ボクは……男だあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああっ！！！！！」

そして時間軸は現在へと舞い戻る。

昨日は色々あったが、まあ語るまでのことでもない。

というか個人的に思い出すとまた心臓に重労働を強いことになる。

ともかく、ちゃんとアストルフォは男性らしい。ロランようやく
普段の自分を取り戻しつつあった。

「だから、言葉通りだよ。聖杯自体にそんなに興味は無いんだ」

「え？ え？ 待つてよ、じゃあなんで？ なんでボクは呼ばれた
の？」

「なんでって、聖杯戦争に参加するからに決まってるじゃないか。

僕は『男の娘』を愛するためだけにお前を召喚したわけじゃないよ」
「誰もそんなこと思ってないよ！ ……ま、まあ、マスターがどう

してもって、言うなら、その……別に、そついうのもいいけど……」

「はあっ！？」

思わずロランは素っ頓狂な声を上げてしまう。

当のライダーは顔を赤らめて上目遣いでロランを見る。無論美少女と見紛う容姿をもつての攻撃だ、破壊力は抜群である。

本気のようにも見えるが、さすがに冗談だろう。冗談であれ。頼む。

……かくいう自分も、そういうのも満更ではないかもしれないか思ってしまったのはここだけの内緒だ！

そもそも女の子に見えてしまうような格好をしていたのも、生前親族や身内からそういう風に遊ばれていたから、というものらしいが。

だからって召喚に応じる際の格好もそれを引き継ぐとは……本人も案外そういう願望があるのかもしれない。

ともあれ、ロランはアストルフオのとんでもない一面を垣間見てしまった気がした。

「ま、まあ、それはいいとして。聖杯自体にそこまでの興味はないけど、僕は聖杯戦争そのものに興味があるんだよ」

「そのものに……？」

「そう。7体のサーヴァントと7人のマスターの殺し合いともなれば、みんなそれぞれ宝具とか礼装とか持ってるよね。僕はそれらが見たいんだ。アイデアとしてもそうだし、そこから閃くものがあるかもしれないし。それ以上に、魔術師同士、英霊同士の戦いそれ自体稀有な事態だからね。それに、甘い考えだろうけど、聖杯戦争に参加っていう『経験』はすごい大きな糧になると思うから」

だからお前が必要なんだよ。

ロランは言い切った。

「なるほど……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～」
「得意っていうか好きっていうか、まあまだ上手ではないけどね」
「そもそも彼の家系はそういった分野に重きを置いて研究を重ねてきたのだ。」

魔術で物を作る。

錬金術の流れを汲んだ系統。

それがマルフォレイ家なのだから。

「そつえば、ライダー。お前はどつなの？」

「え、ボク？」

「そう。召喚に応じたつてことは、お前も願いがあつたんだらう？」

それはやつぱり知つておきたいんだけど」

聖杯を求める理由は、マスターとサーヴァントともに知つておく必要があるだらう。そついつた小さなすれ違いが命取りとなる可能性もあるのだ。

するとライダーは困つたように頬をかいた。

「いやー、その。なんていうか。ボクもこれといった願いは、ないんだけど……」

「……お前人の事言えないぞ」

「う、うるさいなあ！」

顔を赤くして誤魔化すライダー。この赤はさすがに本気の赤だらう。可愛く見えてしまつたが、ロランはすぐに頭に冷や水をかけた。

「……楽しそう、だつたから」

だがライダーの口をついて出たのは、予想外の言葉だつた。

「へ？」

「だから、その……楽しそうだつたから」

「……まあ、そうか。アストルフォつてそついつ性格だつたね、そつえば」

思わず閉口しかけたところで思い出し、ロランは納得する。

冒険好きのトラブルメーカー、どこにでも顔を出すお調子者。悪事という概念無く好き放題暴れまわるが、最悪の事態には踏み込まない。

そついつた彼の性格的特長を考えれば、楽しそうだつたからといふのはしつかりと理由になつてゐるではないか。

「でも！ でも、マスターが聖杯に興味が無くて、ボクは絶対にマスターに聖杯をあげるから……全力で頑張るから」

それが、ライダーとしてのボクの役割だから。

……まだ召喚して3日目だが、ライダーの真剣な眼差しは、初めて見たかもしれない。

純粹で真っ直ぐ。騎士だからというのもあるのかもしれないが、ロランにはそれが彼の本質なのだろうと思えた。

だから、その瞳を見返し、笑顔で応ずる。

「ああ、頑張ろうな、ライダー」

ライダー陣営のワンシーン。

案外このコンビは、色んな意味でピッタリなのかもしれない。

ロラン・マルフォレイ（後書き）

そういえば主人公とか決めてないですね。

全陣営書くつもりでいるので感情移入云々っていうとアレなのですが、今更シフトもできないのでこのままいきます。

かっこよく言えば皆主人公！ みたいなノリで。

アストルフォに関しては元々皆鯖のものをそのまま使おうと思ったのですが、「このサーヴァントのメンツだとちよつとキャラとして弱いかもしれない」という技量の無さの言い訳が先行し、結果アポクリファのアストルフォから外見イメージを拝借しました。男の娘書くの初めてで右も左もわかりません。

このことを友人に相談したところ「カワカミン溢れるアストルフォを頼む」と言われたのですが川上先生のハードノベルをまともに読んだことのない僕に「アサマチみたいな感じでよくね？」と言われてもいまいちピンと来ないので自分なりに期待に沿えられるよう頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4680ba/>

Fate/Shadow Lie

2012年1月13日23時51分発行